ドラマＣＤ
マシュー先生の甘辛ダイエットプログラム

餅のちRe！ バウンドそれでもネコ

決定稿
2016/05/14

監　修　　竹内　葵
ダイエット指導　大江戸舞衣
原案・脚本　チームごましお
脚本協力　　壬崎　馨
演　出　　折田哲郎

【キャスト】

持賀　大祐（もちが・だいすけ）……
立花　戀（たちばな・れん）／黒ずくめの男Ｃ……
マシュー／小瓶神まっしゅう……
キミシマ先輩……
黒ずくめの男Ａ……
黒ずくめの男Ｂ……
他、ガヤ

※この台本は録音用として作成・使用されたものです。
効果音の指定等、一部に実際の製品とは異なる箇所があります。ご了承ください。

【登場人物】

●持賀大祐　本編の主人公。通称モチ。都内の私立大学経済学部三年生。二十一歳。172cm。上京に浮かれ毎日毎晩飲み歩き、合コンと聞けば地球の裏側からでも馳せ参じるが、かませ犬で終わるお調子者のムードメーカー。前作でダイエットに成功するも、脳天気かつ自堕落な生活のためリバウンド街道を驀進中。

●立花戀　大祐の幼なじみ。現役人気モデル。二十一歳。182cm。イケメン。幼い頃、ブタのような体型の男にストーカーされたため太った男を気嫌いしている。大祐にとっては古女房のような存在である。感情が高まると地元の言葉が出てしまう。

●マシュー先生　大祐と戀の先輩。二十六歳。176cm。スレンダー。現在都内にて数店舗のサロンを経営する、心と体の健康スペシャリスト。こと、ダイエットに関しては自分の経験も併せて相当の博識である。

【台本補足】

●大祐たちのいる島は、石垣島の南にある黒島～波照間島の近辺です。ただし大祐は「絶海の孤島」と吹きこまれて硫黄島や沖ノ鳥島あたりと勘違いしています。

1　ここはどこ？　わたしはだれ？

○タイトルコール

BGM　無駄に派手で壮大なジングル

大　祐　「（颯爽と）マシュー先生の甘辛ダイエットプログラム
　　餅のちRe！ バウンド」

戀　　「それでもネコ」

SE　キーボードのカタカタ

大　祐　「ファイル1（ワン）。ここはどこ？　わたしはだれ？」

SE　衝撃的なタッチ

○夕暮れ　大学の前庭

大祐N　「あれは、去年のクリスマス。肥満を理由に、好きな子に振られたオレ、
持賀大祐は、幼なじみと中学時代の先輩に、叱られけなされ蹴飛ばされながらもダイエット生活を開始した。
辛いことも苦しいことも沢山あったけど、結果、なんと！　半年で15キロの！
減量に！　成功しましたあぁぁぁぁーっ!!
しかし。15キロ痩せたと言っても、オレの元の体重は97キロあったわけで……。オレの身長から計算すると、目標体重は65キロ。
まだまだまだまだ、道のりは遠い。
でも頑張らないと！　……がんばら……ないと……」

SE　近づいてくる足音
　　木々のざわめき、遠い雑踏

キミシマ先輩　「おー大祐お疲れー！　今帰りか？」

大　祐　「あ、キミシマ先輩お疲れ様です！　はい、先輩も研究室あがりっすか？」

キミシマ先輩　「おぉ。な、予定ないならこのへんでタメシ食ってかねぇ？
　久しぶりに奢ってやんよ！」
大　祐　「マジっすか!?　やったあ！　オレ！　オレ！　中華行きたいっす！
　ラーメンとチャーハンと餃子が食べたーい！」
キミシマ先輩　「（苦笑）おいおい、いいんか？　お前ダイエット中なんやろ？」
大　祐　「いーんっすよ、たまには！　息抜き息抜きぃ♪」

○大祐の大学近く　中華料理店

SE　厨房で何か炒めたりする音
　席についてる大祐と先輩

無気力バイト（変装したマシュー、正体がバレないように低いトーンでぼそぼそ喋る）
　「らっしゃっせー……なーん……しゃすか？
　（いらっしゃいませ、何にしますか？）」
キミシマ先輩　「生中二つ！　あと適当につまみ持って来て」
大　祐　「オレはぁ、梅レタスチャーハン大盛りと担々麺チャーシュー増し増し、
　あとびっくり餃子！　あ、先輩も食べますか？　じゃあ二枚で！」
無気力バイト　「…あっす（ありがとうございます）」
キミシマ先輩　「おい、お前ちょっとは遠慮せーよ」
大　祐　「ダイエット一段落（いちだんらく）記念すよぉ！　祝って下さいよ！」
キミシマ先輩　「そなの？　ってか、お前またふっくらしてきたよ～な（気がするん
　だけど気のせいじゃねぇよな）」
大　祐　「（爽やかに遮る）それは言わない約束っす！」
キミシマ先輩　「（苦笑）ふっ。しゃあねぇな」
大　祐　「あーっじゃじゃじゃじゃじゃじゃーっす!!!（ありがとうございます）」

SE　シュピーンシュピーン！　シュピーンシュピーン！
　（空気を切り裂く麺の湯切り音）

大　祐　「（感嘆）ぅぉお～、あの店員すげぇ！　手元が見えない」
キミシマ先輩　「初めて見る顔だけど……ホントすげぇな」

SE　がしゃんがしゃんがしゃんがしゃんがしゃん！
（大地を揺るがす中華鍋を振る音）

大　祐　「しかもあんなデカい中華鍋を片手で！　もはや殺気すら感じる！」

SE　風のように大祐たちのテーブルに現れる無気力バイト

無気力バイト　「…しゃした…（お待たせしました）」

SE　コトッ（先輩の前に静かにビール、つまみ数種を置く音）

キミシマ先輩　「おー！　うっまそーだなー！」

SE　ガンッ！（大祐の前に乱暴にビールを置く音）

大　祐　「うぉ!?　びっくりした！」
キミシマ先輩　「んじゃ…」（乾杯の音頭）
キミシマ先輩　「お疲れー」
大　祐（先輩と同時に）「お疲れさまでしたー！」

SE　カチーン　ジョッキの乾杯
ビール飲む二人

キミシマ先輩　「ぷは！　いっただきます！（食べて）まじうめー！　めっちゃうめー！　この店でこんな美味いもの食べたの初めてだわ」
大　祐　「ぷは～！（食べて）本当うめっすね！　なんか懐かしい味だけどドコで食べたか思い出せないみたいな……心のふるさとの味がするっす！
（小声で）でも……態度悪くないっすかあの店員」
キミシマ先輩　「（食べながらで上の空）そぉか～？　いやマジヤバイよこの餃子！
大祐ほら、お前も食えよ」
大　祐　「って先輩食うの早すぎっす！　オレもオレも、いただきます！」

軽く時間経過　食事終えて店を出る二人

キミシマ先輩・大祐　「ごちそうさまでしたぁ！」
無気力バイト　「あっしたぁ…（ありがとうございました）」

SE　ガラガラピシャン　ドア開閉
歩き出す二人　足音

大　祐　「（ほろ酔い）先輩、今日は本当にごちそう様でした！　美味しかったです、ありがとうございました！　また連れってってくださいね!!」
キミシマ先輩　「（同）はいはいはいはい。次はぁ、ダイエット二段落記念で奢ってやっから、ダイエット頑張れよ！　じゃあな、おやすみ～！」
大　祐　「はーい、お疲れ様です！　ありがとうございました！」

SE　遠のいて行く先輩の足音
先輩が見えなくなるまで見送る大祐

大　祐　「（深い溜め息ついて）ダイエット頑張れよ……か……」

SE　てくてく歩き出す大祐
コンビニの明かりを発見する

大　祐　「あ！　あの光は……」

SE　軽やかなステップ
飛行機ゴッコしながらコンビニに向かう大祐

BGM　爽やかで陽気なラッパのメロディ

大　祐　「うぃ～～～ん！　ぶるるんぶるるん！　しゅぱっ！　とうちゃーっく！」

SE　自動ドア開く　ドアチャイム

無気力バイト（またも変装したマシュー）「…らっしゃっせー（いらっしゃいませ）」
大　祐　「あれ？　なんかさっきも聞いた気がする……ま、いっか。さーて、なに買おっかなー！」

SE　店内うろうろする大祐

大　祐　「まずは、チーズとサラダチキンと納豆と豆腐でタンパク質を補給！
さっきチャーシュー増し増しにしたから、これで今日のタンパク質量は
ばっちりだ！　そ、し、て♡」

SE　駆け出す大祐

大　祐　「むひょひょひょひょひょ♪　ウィ～ン、ぶるるんぶるるん！　しゅぱ！
とうーちゃっく！　今日は何祭りにしよっかーな！(次々カゴに入れていく)
チョコに～♪　ポテチに～♪　シュークリーム♪　それからアイス♪　つい
でにおはぎ♪　今日はダイエット一段落記念ってことで、ぱーっと盛大に
いこっと！」

SE　レジに向かう大祐　ドサッとレジ台にカゴを置く

大　祐　「お願いしまっすうー！」

無気力バイト　「らっしゃっ……(ギョッとして)!??　(素が一瞬出て)っちょっと、
こんなに!?　(慌てて)げほっ、ごほごほごほっ」

大　祐　「どうしたんですか？　大丈夫ですか!?」

無気力バイト　「……っす(大丈夫です)。……あっ……す(ありがとうございます)」

大　祐　「あー、よく分かんないけど大丈夫そうならレジお願いしますー♪」

無気力バイト「……っす(うっす《はいわかりましたの意》)」

SE　ピッ、ブー！　ピッ、ブー！　ピッ、ブー！
スキャンするたびレジから鳴り響くアラート音

大　祐　「な、何ですか？　この音」

無気力バイト　「しゃーせん(すみません)。お客様にはこの商品売れないみたい…
…っす……」

大　祐　「なんで!?」

無気力バイト　「体重80キロ以上の方には、この商品売れないっていう法律が……
ある……っす」

大　祐　「ウソ！　そんな法律見たことも聞いたこともないよ!?」

無気力バイト　「しゃーせん。デブ規制法って……ご存知ない……っすか？　この間決まった……ばっかりなんで……お客様……知らなくても仕方ない……かもしれない……っすね……」

大　祐　「まじで??　知らなかった、いつの間に!?　オレ最近新聞もニュースも見てなかったし!!（半泣）」

無気力バイト　「だから……お客様に売れるものは……これだけ……っす……」

大　祐　「チーズとサラダチキンと納豆と豆腐ぅ～？　それじゃあ何の祭りにもならないよ!!」

無気力バイト　「……しゃーせん……」

大　祐　「あ、じゃあそこの肉まん……は炭水化物多めでダメだから、そっちの唐揚げは？　あとフランクフルトとメンチカツ！」

無気力バイト　「……こんな夜遅くに揚げ物っすか……」

大　祐　「いーじゃんかちょっとくらい！　けち！　けちけちけち！」

無気力バイト　「そんなふうに言われても……法律守るのは国民の務め……っす」

大　祐　「（駄々をこねる）食べたい……（泣）うわあぁぁん食べたいよおぉぉ！　唐揚げとフランクフルトとメンチカツ食べたいよおぉぉうわあぁぁあん！　ぅわあぁぁぁあん!!!」

無気力バイト　「ちょ……そんな泣かれても困る……っす」

大　祐　「うえぇぇぇぇんうえぇぇぇぇぇぇん!!!」

無気力バイト　「分かったっす……お客様……どうなっても知らないっすよ……？」

大　祐　「（コロッと笑顔）やった――！　あじゃじゃっす！　ひゃっほぅ！」

SE　足取り軽く店を出て行く大祐　ドアチャイム

無気力バイト　「……っしゃしたー（ありがとうございました）」

○夜　マシューのマンション前

SE　ピンポンピンポンピンポーン　ドアの前でドアホン連打する戀

戀　「マシューせんぱーい！　レンです、いませんかー？」

SE　ドンドン！　ドンドン！　扉を叩く

戀　「せんぱーい！（溜め息）やっぱアポなしじゃ捕まんないよなぁ先輩……仕事のこととか仕事のこととか仕事のこととか！　相談したいこと沢山あるんだけどなぁ……電話してみるか」

SE　携帯取り出す戀　電話をかける　プルルル……カチャ

戀　「（電話つながって）あ、先輩、今どちらに……え？　はい……はい……ええぇぇぇ!?（電話切れて）あ、先輩？　もしもし？　もしも～し！」

○夜の住宅街

SE　大祐の足音

大　祐　「むひょむひょむひょひょ♪　ウィ～ン、ぶるるんぶるるん！　今夜は揚げ物祭りだよ～♪　お、ついでにそこの自販機でコーラ買ってこっと」

自販機の前で立ち止まる大祐

SE　近づいてくる車の音　急ブレーキ
車のドアが開き、三人の足音

大　祐　「（財布をごそごそ）え～っと百円玉百円玉……」

SE　ＳＰっぽい黒ずくめの男たちに囲まれる大祐

黒ずくめの男Ａ　「モチガ、ダイスケ、ダナ？」

大　祐　「へ？（振り返って）な、なんかご用ですか？　めいあいへるぷゆう？」

黒ずくめの男Ｂ　「オマエノ、ミガラヲ、カクホスル！」

大　祐　「いきなり何で!?」

黒ずくめの男Ａ　「アノ、オカタガ、オマチダ！」

SE　大祐の肩を掴む黒ずくめの男Ａ

大　祐　「ちょっ！　ななな何すんだよ！　誰か～、誰かたっけて～！　でぇぇい！」

SE　男の手に噛みつく大祐

黒ずくめの男Ａ　「アウチ！」

大　祐　「今だ！　持賀大祐、逃げます！　とぉっ！　……!?」

走って逃げようとするが足が絡んでつんのめる

SE　ゴチン！

大　祐　「ぎゃん！　……◎×△※Ｑ▼……」

自販機の角に頭をぶつけ意識が薄らぐ大祐

ずるずると崩れ落ちる

黒ずくめの男Ｂ　「オイ、ダイジョウブ、カ」

黒ずくめの男Ａ　「（困惑）コイツ、ジブンデ、アタマヲウッテ、キゼツシタゾ……」

黒ずくめの男Ｃ（実は戀）「スバラスィイ イシアタマダ、ジハンキガヘコンデイル」

黒ずくめの男Ｂ　「カンシン、シテイル、バアイデハナイ！　イソゲ、ヒトガクルゾ！」

SE　ドカドカと靴音、車のドア音

急発進して走り去る車

○深夜の海上（島の沿岸で比較的静か）

SE　タプタプと水音　大祐を乗せたボートが進む

オールを漕ぐ軋み音

舵を取ってる黒ずくめの男Ｃ（戀）

黒ずくめの男Ｃ　「よ～そろ～～」

あのお方（サングラスで変装したマシュー）、船首で腕組み
仁王立ちし、真っ直ぐ前を見つめている

マシュー　「どんぶらこー、どんぶらこー」
黒ずくめの男Ｃ　「（合いの手）ソレ」

黒ずくめの男ＡＢ、オールで舟を漕ぐ

黒ずくめの男Ａ・Ｂ　「ドンブラコー、ドンブラコー」
黒ずくめの男Ｃ　「（合いの手）ソレ」
黒ずくめの男Ａ・Ｂ　「ドンブラコー、ドンブラコー」

意識を失ったままデッキに転がされている大祐

大　祐　「うーん……うぅぅん……」

○大祐の夢

どこか南国の浜辺にレジャーシートとおやつの山広げて
遠足モードの大祐

SE　波の音、海鳥の声
BGM　南国っぽい陽気な音楽

大　祐　「わあぁぁい!!　チョコ！　ポテチ！　シュークリーム！　アイス！　おはぎもあるぅ！（食べまくって）うひょひょひょ～！　祭りじゃ祭りじゃ、大祐祭りじゃー！」

SE　ブォンとホログラムっぽく現れるマシューと戀
それまでのSEと音楽かき消え、暗闇のイメージ音に

マシュー　「（鬼軍曹モード、響きあり）貴様には失望した」

大　祐　「はッ！　先輩!?」
　戀　「（冷たく、響きあり）やっぱりブタはブタのままなんだな」
大　祐　「レン!!」
マシュー　「ウジ虫。もう貴様に会うこともないだろう」
大　祐　「（愕然）そんな……」
　戀　「安心しろ、お前の家族は俺が面倒みてやる」
大　祐　「ちょっと待っ……」
　戀　「お前はそのまま、ブタとして生きればいいさ」
大　祐　「違うんだ！　オレは、オレだって……（半泣）」
　戀　「（遮り）じゃあな。（思いっきり皮肉こめて）ブタ野郎」
大　祐　「待って……二人とも待っ（てくれよぉぉ～）」
マシュー・戀　「（遮り）さようなら（人力エコー）さようならさようならさようなら」

なぜかどこまでも落ちていく大祐

大　祐　「あんぎゃあああああああああああ！」

○翌朝　人けのない白い砂浜

ひとり転がされている大祐、跳ね起きる

大　祐　「（目覚める）ぁぁぁあああああっ…あっ!!?」

SE　静かな波音・海鳥の声

大　祐　「!!　ゆ、夢か！」

SE　静かな波音・海鳥の声
周囲を見回す大祐

大　祐　「や？　お？　あれ？　……まだ夢かぁ……？」

SE　ほっぺを力強くつねる大祐

大　祐　「いっ、いって――――!!　夢だけど！　夢じゃない！」

SE　静かな波音

大　祐　「ここはどこ？　わたしは……だいすけ……」

2　思い出ぼろぼろ～リバウンドの恐怖～

○タイトルコール

BGM　ほんわりとメランコリックなジングル

大　祐　「（穏やかな回想っぽく）マシュー先生の甘辛ダイエットプログラム
餅のちRe！　バウンド」

戀　「それでもネコ」

SE　キーボードのカタカタ

大　祐　「ファイル２（ツー）。思い出ぼろぼろ～リバウンドの恐怖～」

SE　衝撃的なタッチ

○人けのない砂浜

SE　静かな波音
波打ち際ではしゃぐ大祐

大　祐　「（暢気にハイテンション）青い空！　白い雲！　エメラルドグリーンの海！
果てしなく続く水平線！　すっげ――！　綺麗だなあ、こーんな白い砂浜っ
て本当にあるんだぁ」

SE　パシャパシャと浅瀬の水を蹴り上げる

大　祐　「おー、水が透き通ってる！　あ、小っちゃい魚いた！」

SE　静かな波音

大　祐　「そうだ！　ちょっと写真撮って、戀に送りつけてやろっと♪」

SE　ズボンのポケットから携帯取り出す大祐
写真を撮りまくる

大　祐　「まずは海！（シャッター音）空！（シャッター音）珊瑚礁！（シャッター音）ヤシの木！（シャッター音）砂浜！（シャッター音）そしてオレ！
（無音）」

気づく大祐

大　祐　「ん？　あ、電池切れた……って、どええぇぇ――っ!?　ケータイ使えなくなったじゃん！　電話も充電も出来ないじゃん!!
（海に向かって叫ぶ）オレのばかやろーっ」

SE　静かな波音・海鳥の声

大　祐　「（しょんぼり）で、オレは何でこうなったんだ……？　こんな無人島みたいなトコで一体どーすればいいんだ？」

どこからともなく打ち上がってくる小瓶

SE　コロコロ転がって大祐の足にコツンとぶつかる

大　祐　「（見降ろして）ん？　なんだこの小瓶？　中になんか紙が入ってるぞ？」

SE　瓶のコルク栓を引き抜く大祐　出てきた紙をクルクルと開く

大　祐　「（読む）『ここは東京から二千百三十キロ離れた絶海の孤島です。
今日から二週間以内に健全なる精神と健全なる肉体を手に入れないと、
東京には帰れまテーン♪』……？」

SE　静かな波音・海鳥の声

大　祐　「（怒りこみ上げ）はぁーん？　意味わかんないんだけど。どこの誰だか
知らないけど、人をおちょくるのもいい加減にしろよ、コンチキショーめっ」

SE　紙を破りまくる大祐

大　祐　「チキショーめチキショーめチキショーめ！（紙くずを空に撒く）ふん！」

SE　舞い散る紙音

大　祐　「（深い溜め息）はぁ～……（情けなく）東京から二千百三十キロってどの
辺なんだろう……（思いついて）そうだ、船とか！（見回して落胆）見えな
いよな……。島影とか！（また目をこらして見回し、落胆）一つもねぇ……
（空を見上げて）飛行機も飛んでない……オレはマジで絶海の孤島に置き去
りにされちゃったの？」

しょぼんと砂浜に目をやる大祐
先ほど自分が倒れていたあたりに黒い塊を見つける

大　祐　「おや!?　あそこに何か黒い物体が……！」

SE　砂浜を走る大祐　立ち止まってしゃがみ込む

大　祐　「むむ！　なんだこれ？　黒い……ドラムバッグか……。登山用みたいな
やつだけど、なんか……」

SE　軽くバッグ叩く大祐

大　祐　「中、パンパンだなぁ……危ない物とか入ってなきゃいいけど……まぁいいや、開けちゃえ！」

SE　ファスナー開ける大祐　中身を次々取り出す

大　祐　「ん……これは銀色のシート？　マッチ？　それに懐中電灯……軍手……新聞……乾電池……タオル……救急セットに乾パン、こりゃ防災セットか？　それから何だこれ……塩？　鍋？　塩要るー？　鍋要るー？　で、この白いヤツは……パンツか……って、えぇー!!　今どき白のブリーフ!?　おじいちゃんかよ！　あり得ねぇだろもぅ……お！　何か重いと思ったらその下にでっけえ水入ってた！　四リットル……？　の、ペットボトル三本！　助かった、暫くはこれでいけそうだな！」

SE　更にバックをごそごそあさる大祐

大　祐　「ん？　底の方に何かツルッとした、重くて白いものがある……」

SE　バシュ！　体重計を取り出す大祐

大　祐　「あんぎゃ――――！　これは体重計!!　今は見たくもない体重計!!!（持ったまま顔を背け）いやーん、あっちいってー！」

SE　体重計振り回す大祐　紙がピラピラはためく

大　祐　「（気づき）ん？　なんか表面に紙が貼ってあるぞ……？」

おそるおそる紙を読み上げる大祐

大　祐　「（読む）『サバイバル基本原則三か条。
その一、三時間は急激な温度変化に耐えられる。（まずは住みかを確保せよ。）
その二、三日間は水がなくても生きられる。（次に飲み水を確保せよ。）
その三、三週間は食べ物がなくても生きられる。（お前は一ヶ月以上平気かもしれない。）
以上、健闘を祈る。』まる」

愕然とする大祐

大祐　「なんじゃこりゃあああああぁぁぁぁぁ!!
なに？　拐（かどわ）かし？　オレは麗しき乙女のごとく拐かされたの？
そしてなんで突然サバイバルを強いられてるの!??
バトルでロワイアルなの!?　だとしたら、こうしちゃいられない！　まずはどっかに隠れなきゃ！　って、このバッグだいじぃぃ!!」

SE　バババババドカンバコン　急いで荷物を元に戻す大祐
ファスナー閉めて立ち上がりながらバックを持ち上げようとする

大祐　「行くぞ、おりゃ！　う!?　うぎぎぎぎぎ……お、重いぃぃ……でも命の水は置いてくわけにはいかない……ぐぎぎぎぎぎぃ……ファイトー、いっぱぁぁぁっ！」

SE　よろよろ立ち上がる大祐

大祐　「よっ！　こらせっと！　と、とりあえずどこ行けばいいんだ？　そうだ部屋探しだな！　サバイバルナントカ三ヶ条にも書いてあったし、ＲＰＧでも新しい町に着いたらまず探索だし。
（無理やり自分を鼓舞する感じで）そんで人を探そう！　壺を割ろう！　タンスをあさろう！　宝箱をゲットだぜ！」

ふらつきながら探査を開始する大祐

SE　カァカァキーキー、ざわざわ　アマゾンの奥地のような密林音

大祐　「ぎゃー！　何この鬱蒼とした森！」
大祐　「ぎゃー！　蜘蛛の巣が顔に！」
大祐　「ぎゃー！　何か柔らかいモノ踏んだ！」
大祐　「ぎゃー！　細かい虫の大群飛んできた！　ぐぇぇ！　食べちゃった！」
大祐　「ぎゃー！　ぬるっとしたものが首筋に！」

ジャングルに木霊する大祐の悲鳴

大祐エコー　「ぎゃー　ぎゃー　ぎゃー」

軽く時間経過　暗くなり始めてる周囲
息を切らして立ち止まる大祐

大　祐　「（息切れ）人もいない！　壺もない！　タンスもなけりゃ、宝もねえ……」

SE　ポツポツザザザー　亜熱帯のスコール

大　祐　「しかも雨降ってきた！　詰んだ!!　あ、あそこに洞穴（ほらあな）発見！
詰んでなかったぜ、洞穴に退避！」

SE　ズルズルドタドタ　走ろうとするが荷物と疲労で足が遅い大祐

大　祐　「（ぜーはー）うひー、なんじゃこのゲリラ豪雨的などしゃ降り！　てか
これがスコールか！　洞穴、とうちゃーくっと！」

SE　ドカッ　ドサッ　洞穴にバッグ投げ出して座りこむ大祐
洞穴に響く雨音

大　祐　「（ぜーはー）だーもー、パンツまでずぶ濡れっぽい……ぶえっくしょいっ！
（震えて）寒っ！　全然時間分かんないけど、日が暮れてきたからもっと
寒くなりそうだ……」

○フラッシュバック

大　祐　「サバイバル基本原則三か条。
その一、三時間は急激な温度変化に耐えられる」

○現実に戻って

大　祐　「まずいよまずいよ、このままだと三時間後にはあの世逝きだよ！　とりあえず服脱いで乾かさないと！　さっきのバッグにマッチとか新聞紙とかあったよな？」

SE　ファスナー開けてバッグをがさごそ
マッチと新聞紙取り出す大祐

大　祐　「よし、あったあった！　あとはこのへんの枯れ葉かなんか集めて……」

SE　カサカサカサ　洞穴に積もった枯れ葉をかき集める大祐

大　祐　「新聞紙をひねって火をつけてっと……」

SE　新聞紙を一枚破いてひねり、シュバッとマッチを擦る
ボッと火が点く　枯れ葉に燃え移る

大　祐　「（空気送るアドリブ）ふ～、ふ～……（安堵）ふう、ＢＢＱ合コンが役に立ったぜ！」

SE　たき火（雨音少しずつFO）

大　祐　「あったけぇな…」

たき火を見つめる大祐

大　祐　「（モノローグぽく）いったい何でこんな事になったんだろう。
ライフラインもない無人島にこんなバッグ一つで放り出されて、帰る方法もない、誰かに助けてもらう事だって出来やしない。
オレを襲った奴らは何が目的だ？（徐々に怒りこみ上げ）何でオレを襲った？
あの小瓶は一体何様だ？　健全な肉体とか精神とか帰れまテンとかふざけやがって……何でオレがこんな目に遭わなくっちゃいけないんだ！　オレが何したって言うんだよ！　そんな理由どこにも！」

SE　たき火はぜる
ハッと思い返して我に返る大祐

大　祐　「そんな、理由……」

うずくまってたき火を見つめる大祐

○前作の回想

戀　「どこがぽちゃだ。このブタ野郎！」
マシュー　「貴様に大切なのは食事に向き合い、食事の仕方を改善することだ！」
マシュー　「立てウジ虫！　泣いている場合ではない」
マシュー　「大祐くんならきっとやり遂げられる。僕は信じてるからね」

○現実に戻って

大　祐　「（モノローグぽく）これは天罰……？　マシュー先輩の教えを守らなかった……」

○フラッシュバック　過去の大祐

大　祐　「わっ！　ほ――い！　15キロも痩・せ・た♥　大祐偉い！　日本一！　あ、こんなところに沖縄土産のちんすこう発見♪　一つくらい平気かな？
いっただっきまーす♥」

○現実

大　祐　「（〃）糖質は、一度クセになるとなかなか止（や）められない。お腹はいっぱいの筈なのに、体が糖質を求めてしまう。つい甘い物に手が伸びる」

○過去の大祐

大　祐　「むひょう♥　おはぎ三割引きかぁ！　ここのおはぎ絶品だし二つ買っちゃおっと！　今日と明日で分けて食べれば、甘い物も怖くない！　なんちて♪」

○現実

大　祐　「（〃）一瞬の食べる喜び。でも、それはすぐに後悔に変わる。食べては後悔をくり返す……これぞ糖質エンドレス」

○過去の大祐

大　祐　「ウワェーイ！　タンパク質タンパク質！　あ、唐揚げいいね！　イカフライいいね！　アジフライも！（一人ツッコミ）揚げ物だと？　ま、いぃじゃんいぃじゃん、細かいことは気にしな～い♪」

○現実　（このあたりから大祐の歌適宜被せる）

大　祐　「（〃）三ヶ月で15キロ痩せたと言ったけれど、そのあと実は少しずつ、でも確実に体重はリバウンドしてたんだ」

○過去の大祐

大　祐　「（酔ってる）ふ～、今日の合コン楽しかったぁ！　食って飲んだらやっぱシメはラーメンっしょ！　ずるずるむしゃむしゃごくごくごくごく……ぷはぁ！　これがサイコーに美味ぁい♥　まっ、ダイエットはまた明日から頑張ろぉっと♪」

○現実

大　祐　「（〃）五キロリバウンドしても、まだまだ許容範囲だなんて余裕ぶっこいてたけど。とうとうそれが十キロになりかけたところで、体重計に乗るのを止めてしまった。やっぱ天罰かもなぁ……先輩……レン……」

○シーンに適宜被せる大祐の歌（適当な節回しでお願いします）

大　祐　「想定内♪　想定内♪　三キロなんて想定内♪
大祐なら出来る～♪　三キロなんて～すぐ痩せられる～♪
想定内♪　想定内♪　五キロなんて想定内♪
大祐ならやれる～♪　五キロなんて～誤差のうち～♪
想定外♪　想定外♪　十キロなんて想定外♪
そんなコトにはなりません～♪　想定外は起こりません～ん♪」

3　デブ規制法

○タイトルコール

BGM　朝七時のニュース番組風ジングル

大　祐　「（ニュースキャスターっぽく）マシュー先生の甘辛ダイエットプログラム
餅のちRe！バウンド」
戀　「それでもネコ」

SE　キーボードのカタカタ

大　祐　「ファイル３（スリー）。デブ規制法」

SE　衝撃的なタッチ

○朝　大祐の洞穴（住みか）

SE　遠い波音、爽やかな鳥のさえずり
眠ってた大祐、目を覚ます

大　祐　「まっ、まぶしいぃぃ……もう朝か？　いつの間に寝ちゃってたんだろう」

SE　起き上がる大祐　腹が盛大に鳴る

大　祐　「うぅ、腹減ったぁ……」

SE　ザクッ……パキパキッ　枯れ枝を踏み折る微かな生き物の気配
空腹のせいか敏感に気づく大祐

大　祐　「ん!?　近くに何かいるっぽいぞ！　ヤバい、ば、バトルでロワイヤルか!?
どーする？　隠れてこのままやり過ごすか、それとも思いきって出て行くか
……でも熊とかゴリラとかだったら……」

SE　ザック……ザック……ボキッ……バキッ……
少しずつ近づいてくる気配に焦る大祐

大　祐　「ヤバいよヤバいよ、こっちに向かって来る！　はっ、もしかしてあの黒い
ヤツらかも！　どどどどーしよう!?　オレ完全に丸腰じゃん！　何か武器…
…使えそうなものはねぇのかな!?」

SE　バッグをひっくり返す大祐
ゴスッガシャッ　硬いものが落ちるくぐもった音

大　祐　「なんだこの黒い袋？（ファスナー開けて）ん？　おぉ……」

SE　ショットガン取り上げる大祐（重い）

大　祐　「（驚愕）すげぇごっつい銃じゃん……ライフル？　ショットガン？　これエイリアンとか倒すやつじゃね？　あれ、でもタンクついてるし……中、入ってんの油かな？　てことは火炎放射器ぃ？　えぇ～、（泣）オレやっぱり戦わなきゃいけないのぉ!?」

SE　ザックザック　バキボキッ　近づく足音
ギャギャギャ　不気味な声をあげて鳥が飛び立つ
焦りまくってパニック寸前の大祐

大　祐　「だ、ダメだ！　考えてたら殺される！　オレは……オレはこんなトコロで死にたくない！」

SE　ザクッ！　洞穴の外で立ち止まる足音
銃を構えてすっくと立ち上がる大祐

大　祐　「うわああぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

洞穴から飛び出してショットガン（巨大な水鉄砲）撃つ大祐

SE　ガシャン（スライド式のポンプアクション～装填）
ドン！（発射）　ドバシャアッ！（盛大な水音）
水の塊をまともに浴びる戀　かなりの水圧にのけぞる

戀　「うわあ！」

SE　後ろ向きに倒れる戀
大祐も水鉄砲の勢いで後ろに尻餅　ドシャッ

大　祐　「あいたたたた……」

戀　「ひっでぇ！　朝っぱらから何すんだよ、おい大祐！」

大　祐　「あれ……？　この声は」

顔上げる大祐　戀と目が合う

大祐　「レ、レン？　レェェェン～～～!?」
戀　「お前のせいでびしょ濡れだぞ！　ってかいきなり何なんだよ、オレを殺す気か!?　水鉄砲でなけりゃマジ死んでたぞ！」

SE　水鉄砲放り出して戀に駆け寄る大祐　戀にしがみつく

大祐　「うっ、うっ、うぅぅぅぅぅ、（大泣き）うぎゃ――ん、レェェェェン～～」
戀　「ど、どうした、大丈夫か？　ただでさえ酷い顔が、ふた目と見られないくらい酷くなってるぞ」
大祐　「（まだ半泣き）うっせぃ！　ふっふえっ、ふえええへっへへへ（半泣き笑い）」
戀　「（やれやれと母親風に）泣くのか笑うのかどっちかにしろ。怖いぞ！」
大祐　「ぐすぐす……いやー、安心しちゃってさ」

SE　その場に座り直す大祐

大祐　「オレこのまま死んじゃうかもしれないと思ってたんだけど。お前にもう一度会えて本当によかったよ、ぐす」
戀　「（冷静に呟く）いや……銃持ったお前は殺気の塊だったぞ」
大祐　「ところでレン……お前なんでここに？」
戀　「あ、いや、えっと（ヤバい、大祐に見つかるつもりじゃなかったんだっけ）」
大祐　「（勝手に勘違い）まさか、お前もオレと同じ目に？」
戀　「あっ、あぁうん、そうそうそう」
大祐　「（心から同情）そっかー、お前も大変だったんだな！　でも」

SE　戀の両肩を叩く大祐

大祐　「安心しろ、これからはオレが一緒だ！　力を合わせて頑張ろうな!!」
戀　「え？　あ？　おう……」
大祐　「とりあえず、この状況を打開するために知恵を出し合う必要がある。作戦会議だ！」
戀　「（シリアスに）いや、その必要はない」
大祐　「レ……レン？」

SE　大祐の両手を掴み、ガシッと両手でシェイクハンドする戀

戀　「お前はお前で頑張れ。じゃっ」

SE　ズドドドド……　走り去る戀

大　祐　「うえええええ!?　待ってよ、どこ行くんだよ！　戀！　レ～～～～～ン!!!」

大祐の絶叫、虚しく消えていく

大　祐　「レン……うぅぅ……」

SE　ガクッ　膝を落とす大祐

大　祐　「いや……レンがこんなトコロにいる筈がない……（自嘲）人間、極限状態に置かれると幻覚とか見るってゆーしな」

SE　ピュー　どこからか飛来する小瓶（牛乳瓶ぐらいの大きさ）
ボコン！　大祐の頭にぶつかる小瓶　地面に転がる

大　祐　「ぎゃっ！　痛ててて……なんだこれ？　また小瓶？」

SE　拾い上げる大祐

大　祐　「また紙が入ってる！」

SE　コルク栓を抜く大祐　中の巻き紙をクルクル開く
読み上げる大祐（すぐに鬼軍曹モードのマシューの声に替わる）

大祐・マシュー　「デブ規制法第三章。
リバウンド防止プログラム（以下、『本プログラム』という）は、リバウンド防止、又は停滞期解消について、以下の項目を厳守するよう、国民に求めるものである。

第百一条　本プログラムは二週間ワンセットと定める。
二週間ダイエットプログラム（前回ドラマＣＤ参照）で体重の停滞、又は心の萎えを感じたとき、適宜遂行するものとする。

第百二条　毎日、自分の体重20キログラムにつき一リットルの水を飲むこととする。100キログラムの場合は五リットルである。但し、一度に飲む量は180ないし200ミリリットル、大柄な者であっても300ミリリットル程度に留めなければならない。こまめに飲むことが重要である。

第百三条　日々の日課として通常より30分早く起き、朝日を浴びることとする。これの主たる目的は体内時計のリセットであり、所要時間は20分ないし30分を理想とする。
室内においては窓も開け、常に外の空気も取り入れなければならない。

第百四条　以下に記す、一日24時間における身体（しんたい）の生活サイクルを深く理解し、且つこれを毎日の行動パターンの指針として、日々実践しなければならない。
　午前四時から正午までは『排泄と消化の時間』である。
　正午から午後八時までは『摂取と浄化の時間』である。
　午後八時から午前四時までは『吸収と利用の時間』である。

第百五条　日々の体重、体脂肪率、筋肉量、基礎代謝量の計測及び記録を怠ってはならない。毎朝の排泄後と定め、同じ格好で測ることが重要である。

第百六条　糖質による中毒症状を緩和し、正常な状態へと戻すために、これを極力避けることとする。
一度の食事については、以下に記す通りの摂取に努めるものとする。
　タンパク質を多く含む食品を、片手に乗る程度。
　野菜（葉野菜推奨、果物禁止）を、両手にいっぱいの山盛り。
以上、食欲をはじめとする感情の起伏が収まるまで、一日何食摂っても良い。
但し、上記は必ずセットで摂取しなければならない。
なお、本プログラム期間は、カロリー計算はしなくてよいものとする。

第百七条　『自分は凄い』と、最大限の自己評価を一日10回かける三セット行うこととする。一日100回、21日間の継続が理想である。
これの主たる目的は、周囲の人間をも大切に出来る度量を養うことである。そのためにまず自分の価値を認め、自分を大切にすることから始めるものとする。

第百八条　部屋の乱れは心の乱れと心得なければならない。多忙な折も毎日15分間の清掃を怠らないよう努めることとし、洗濯や食器洗いも溜めこんではならない。『片付ける』ことよりも『捨てる』ことに主眼を置き、本当に自分に必要な物を選別することが重要である。

第百九条　今日の汚れは今日落とすこととする。また、今日の疲れを明日に持ち越してはならない。
本プログラムでは、38ないし40度のぬるま湯による、20分以上の半身浴を推奨する。これにより心身のリラックス及び発汗、デトックス、代謝アップを促進するよう、日々努めるものとする。

第百十条　就寝前に20分間、瞑想の時間を持つこととする。
日々の雑事は精神状態に滞りをもたらす。これを解消し、且つ感情の制御を体得することが主たる目的である。
最初は五分ないし十分間、ただ目を閉じて静かに座るだけでもよいが、習熟に併せ徐々に時間を延長するよう努めなければならない。理想は朝晩20分、14日間の継続とする。」

読み終わった大祐、紙を持った手を降ろす

大祐　「（ホロリ）今度は何だかマシュー先輩の幻聴まで聞こえてきたし……てかこんな法律いつの間に出来たんだか、オレ全然知らないし。……つまりオレは法律違反の犯罪者だってこと？　だからこんな島流しにされちまったってこと？（落胆して）はぁ……」

沈みかける大祐、気を取り直そうとして

大　祐　「いやいや、ちょっと待てオレ、よく思い出してみろ……あの時、確か黒いヤツらの一人が『あのお方が』とか言ってなかったか……？」

○回想　襲われる大祐

黒ずくめの男Ａ　「モチガ、ダイスケ、ダナ？」
黒ずくめの男Ｂ　「オマエノ、ミガラヲ、カクホスル！」
黒ずくめの男Ａ　「アノ、オカタガ、オマチダ！」

○現実に戻って

大　祐　「あのお方って誰だろ……ＦＢＩ？　ＣＩＡ？　それともインターポールの人かな？」

無人島生活で独りボケツッコミが多くなってる大祐

大　祐　「（戀のマネしてカッコよく）いや、お前何言ってるの？　もう、あのお方しかいないだろ？」
大　祐　「はっ！　そうか、あのお方か！」
大　祐　「（戀のマネ）そうそう、あのお方！」
大　祐　「そっかそっか、あのお方か！」
大　祐　「（戀のマネ）お前、あのお方を忘れるなよー（笑）」
大　祐　「いやー、忘れる訳ないだろー!?　HAHAHAHA！」
大　祐　「（戀のマネ）驚かせんなよ、あははは」
大　祐　「HA！　HA！　HA～HAHAHAHAHAHAHA！（素に戻って）だからあのお方って誰～～～っ!?」

虚しく響く大祐の絶叫

4　デトックス／サバイバル

○タイトルコール

BGM　子ども番組風ジングル

大　祐　「（歌のおにいさんっぽく）マシュー先生の甘辛ダイエットプログラム
　　餅のちRe！ バウンド」

　　戀　「それでもネコ」

SE　キーボードのカタカタ

大　祐　「ファイル4（フォー）。デトックス／サバイバル」
　　※スラッシュは発音しません

SE　衝撃的なタッチ

○洞穴（大祐の住みか）の前

大祐N　「（シリアスに。途中から大祐の十ヶ条FI）ここは、東京から二千百三十キロ離れた絶海の孤島。ライフラインはおろか全ての文明から取り残されたこの島に、ドラムバッグ一つで放り出されたオレ、持賀大祐は、生き延びるため、そして平和な日常を取り戻すため、不思議な小瓶に託されたメッセージを読み返している」

十ヶ条を読み返している大祐　最初はナレーションにかぶせて

大　祐　『（小学生の社会の教科書音読風）最初は五分ないし十分間、ただ目を閉じて静かに座るだけでもよいが、習熟に併せ徐々に時間を延長するよう努めなければならない。理想は朝晩20分、14日間の継続とする。』
ふむふむ……要するにオレは、この十ヶ条を守って、健全なる精神と健全なる肉体を手に入れれば晴れて無罪放免ってことだよね？　健全なる精神と健全なる肉体かぁ……（暫し考え込み、パッと明るく）よーするに元気な心と体を手に入れろってことかな！　病も気からって言うし。

そうだ、そうに違いない！　心が元気なら、体も元気！
よ～し、くよくよしてる場合じゃないぞ。そうだ、こいつの（紙掲げて）
第百七条！（読む）『「自分は凄い」と、最大限の自己評価を一日十回、三
セット』か！　いよっ！　オレすげぇ！　オレ天才！　オレ日本一！　大統
領！　元気が取り柄！　持賀大祐！」

おもむろに気を溜めはじめる大祐

大　祐　「はあああああああああああああああああああああ」

SE　ピュー　どこからともなく飛来する小瓶
ゴツン　大祐の頭にぶつかって地べたに転がる小瓶

大　祐　「痛て！　何だよ、せっかく法律守ってスーパーヤサイ人になりかけてたの
に!!　何でいつも頭めがけて飛んでくるんだ」

SE　小瓶を拾い上げてコルク栓を抜く大祐　巻紙を開く

大祐・小瓶の神（マシュー）「（大祐の読む声、すぐに鬼マシューとクロスフェード）
『貴様、何をやっている。そんなことでは、いつまでたっても健全なる精神
と肉体は手に入らないぞ、この下等生物が。』

大　祐　「（身震いして）ふぉ～～、幻聴キタキタ！……もう分かったぞ、この島は、
神のお告げが小瓶と化して降ってくる島なんだな！（ビシッと巻紙を指さし）
やい小瓶の紙、いや神！　お前に名前をつけてやる。お前は小瓶神（こびん
しん）まっしゅうだ！
（コロッと態度変えて）そんでさぁ、結局オレは何すればいいわけ？」

SE　ピュー　どこからともなく飛来する小瓶
ゴツン　大祐の頭にぶつかって地べたに転がる小瓶
※以降、瓶を拾う～紙を開く段取り省略

大　祐　「いて!!」

まっしゅう（マシュー）「貴様は本当にばかなのか？　ここに書いてあることをそのまま実行すればいいだけだ、この能なしが」

大　祐　「おおぉぉ、小瓶神まっしゅう！　お前なかなか頼もしいな。ところでオレすげぇ腹減ってんだけど昨日乾パン食いきっちゃってさぁ……てへぺろ♥どうしたらいいと思う？」

SE　遠い波音、鳥の声

大　祐　「（残念）無視かよ……仕方ないなぁ、よし！　何か探しに行こう。魚とか木の実とか落っこちてるかもしれないし」

SE　ピュー　ゴツン！　※以降地べたに転がる小瓶も省略

大　祐　「ぎゃん！　バカになっちゃうぅぅ！」

まっしゅう　「落ちている魚を食べると腹を壊すぞ。それよりも、午前中は体が排泄モードに入っている。こんな時にこそ、腸内洗浄をせよ。方法は別紙参照のこと」

大　祐　「あ、そうか！　十ヶ条に『午前四時から正午まで「排泄と消化の時間」』って書いてあったな……腸内洗浄をせよか……方法は別紙？」

SE　紙をめくる大祐

まっしゅう　「腸内洗浄のためのデトックスウォーターの作り方。

用意するもの、常温の浄水、一リットル。天然の塩、九グラム。

作り方、一。まず、浄水を200ミリリットルだけ分けて加熱する。

二。天然の塩を入れた大きめのボウルに、一で沸騰させた浄水200ミリリットルを注ぐ。

三。塩が溶けたら、そこに残った常温の浄水800ミリリットルを全て注ぎ入れ、軽く混ぜる。以上。

腸内洗浄の方法、一。上記レシピの塩水を一気飲みする。

二。一時間前後で排泄が始まる。最初は普通の便が排泄されるが、回を追って柔らかい便から水便となる。数回手洗いに行く必要があるため、午前中に出かける用事のない日を選んだ方が無難である。

三。水便を確認したら飲食して良い。

捕捉。三日から五日間、連続して行っても良い。」

大　祐　「なんじゃこりゃ、加熱？　ってことは、まず火を熾（おこ）さなくっちゃ！」

SE　枯れ葉や石など集め始める大祐

大　祐　「（枯れ葉集めながら）そうだ、このへんの石とか適当に積んでかまどみたいなの作った方がいいかも……確かバッグに鍋入ってたし……そーいや、塩も入ってたな……あ、このちょっと大きい石使えるかな？　よいせ、っと！」

SE　大きめの石を掘り返す大祐
キチキチキチキチ　不気味な生き物の声　ひっくり返る大祐

大　祐　「ぎゃあぁす！　でっかいムカデいたぁぁ!!　いやーん！　軍手！　軍手ぇぇ～～!!」

SE　ドタバタ駆け去る大祐

軽く時間経過　完成したかまど

大　祐　「（そこそこ疲れてる）よっしゃ～！　鍋置けるかまど完成っと！　あ～腹減ったぁぁ……ここからお湯を沸かす、と……」

SE　マッチを擦って新聞紙に着火　枯れ枝に火を移す

大　祐　「水200ミリリットルって、まっしゅう一本分ぐらいかな？　いいや、適当に目分量でいけるっしょ」

SE　鍋にペットボトルの水を注ぐ　すぐに沸騰
（鍋既に温まってるので、注ぎ始めじゅわ～と蒸発音がする）

大　祐　「おぉ、あっとゆー間に湧いた！　んでここに塩九グラム……」

SE　サラサラサラ　きちんと計らずに目分量で注ぐ大祐

大　祐　「こんなもんでいっか？　溶けたら鍋を火から外して……」

SE　平らな岩の上に鍋を置く

大　祐　「ここに常温の水を、800ミリリットル？　注ぐっと」

SE　ドボボボボ

大　祐　「よし出来た！　これを一気に飲み干す！　がぼがぼがぼ……って何これしょっぱ！　しょっぱっ!!　一気に飲むとかムリじゃね……がぼがぼ！　やめて死ぬ！　拷問!!　人殺しー!!」

SE　ピュー　ゴツン！

大　祐　「いで!!」

まっしゅう　「くだらないことをしてないでさっさと飲め。」

大　祐　「(恨めしく)小瓶神まっしゅう、なんてヤツだ……でもオレは負けないぜ！がぼがぼがぼ、ごっぱあああ！」

SE　ピュー　ゴツン！

大　祐　「はぅっ!!」

まっしゅう　「腹いっぱいになっただろう？　貴様にはこの程度の朝食がお似合いだ。」

大　祐　「ふざけんな！　こんなんで、お腹いっぱいになるわけ……く、ぐはああ……苦しい……はち切れそうだあああ！　よ、横にならせてくれええ……う、う、うぅ、よ、横になっても苦しいぃぃ！　しむ(死ぬ)、しむー！」

SE　ピュー　ゴツン！

大　祐　「ひでぶっ!!」

まっしゅう　「静かにしろ、一時間の辛抱だ！」

大　祐　「一時間後に何があるっていうんだあぁぁ」

SE　ごぐゅるるるるる　大祐の腹の音

大　祐　「む!?　は、腹が……！　う、産まれるうぅ、異形の怪物がオレの腹をつき破って～（泣）む、むむむ、と、トイレに行きたいぃぃ（泣）」

SE　ピュー　ゴツン！

大　祐　「（断末魔）ほんぐおぉぉぉ!!」

まっしゅう　「トイレならあっちだ」

大　祐　「（苦しみ悶え）あっちってどっち～～ぎゃあああ、みつけたあぁぁぁ」

SE　脱兎の如く走っていく大祐

軽く時間経過　砂浜の端のヤシの木蔭でひっくり返っている大祐

SE　波の音、葉擦れの音

大　祐　「毒を盛られた……」

SE　サワサワ、ピュー　ヤシの葉の間から落ちてくる小瓶
パシッと大祐片手を上げてキャッチ

大　祐　「（キャッチ）はっ！　初めて捕まえてやったぜ……オレすげぇ……」

まっしゅう　「毒ではない。これはスーパー塩水マッハ二十号くんだ。」

大　祐　「（疑わしく）まっはにじゅ～ごぉお？」

まっしゅう　「文明社会では海水ソリューション、もしくはソルトウォーターバッシング、もしくはマスタークレンジングと呼ばれている。天然の塩を使うのがポイントで、これに含まれるにがり成分、マグネシウムが腸の動きを誘発し、便通を良くする。その結果、宿便が解消される。」

大　祐　「なるほど……呪いの水じゃなくて魔法の塩水だったんだな。でもさ、こんなに一気に塩水飲んでいいわけ？　いいわけ？　ついでに宿便って何？　宿便が解消されるとどーなんの？　そこんとこどーなのよ、小瓶神まっしゅう！」

不意に現れる戀　頭上から大祐を覗きこんで

戀　「（やる気のない教授のように解説）えー、スーパー塩水マッハ二十号くんの塩分濃度は、体液、つまり生理食塩水と同じなのでありますー。そのため胃などで吸収されることなくー、直接腸へ届きー、腸内を洗浄し、そのまま（ここだけ強調）うんこ！　となって体の外へ排出されるでありますー。」

大　祐　「うんこ！　……てか戀、の幻覚！　また出たな!!」

戀　「（構わず）宿便とはー。すなわち腸内にこびりついて排泄されずに滞留し、えへん、つまり残り続けるー、老廃物かっこ毒素、の総称のことでありますー。宿便が取れて腸が綺麗になりますとー、腸の動きが良くなりー、体全体の代謝活動も活性化されるでありますー。えー……、今回我々が行うプログラムは心と体のデトックスー、つまり解毒が目的でありますー。まずは大祐くんの体内の清掃活動から行いましたでありますー。」

大　祐　「教授！　ありがとうございます、教授！」

戀　「これが我々の朝食であります。」

大　祐　「教授ぅ！　殺生でありますううぅ！」

戀　「殺生で結構でありますー」

大　祐　「……でも、言われてみれば確かに全然腹も減ってないし、しょっぱかった筈なのに喉も渇かない。なんか……身体もすっきりしてる感じするな」

戀　「（会心の笑み）だろ？　そしたらこれからどうするよ」

大　祐　「あの十ヶ条によると……部屋の掃除しろ？　とか何とか……。そうだ戀、消えちまう前に案内しとくぜ。オレの、とっておきの住みかに！」

SE　立ち上がって走り出す大祐　見送る戀

大　祐　「（少し遠くから）何やってんだ～、レンの幻覚、早く来いよ～」

戀　「（苦笑）幻覚ねぇ……」

SE　小瓶を拾い上げて砂を払う戀

戀　「頑張れよ、大祐」

軽く時間経過

大祐N　「洞穴に着いて振り返った時、やっぱりレンはいなかった。落ち葉をかき出したりバッグの中身を整理したり、絆創膏で岩壁に十ヶ条の紙を貼ったりしながら暫く待ってみたけれど……
消えちまったんだと諦めると無性に寂しくなる。
洞穴の掃除を終えたオレは、さっきレンが現れたヤシの木の下に戻って、ぼんやりと海を眺めている」

大祐寂しすぎて一人芝居

大　祐　「そろそろお腹が減って来ましたね、教授」
大　祐　「（戀教授風）持賀氏はぁ、なにかー食せる物を持っているのでーありまするでしょうかぁ？」
大　祐　「オレが持ってると思いますか、教授！」
大　祐　「（戀教授風）えー、ごほん。あなたに聞いた私が馬鹿でしたでありますー」
大　祐　「教授見捨てないで！」

素に戻る大祐

大　祐　「ふぅ……寂しい……」

SE　ピュー　ゴツン！

大　祐　「あだっ！」
まっしゅう　「早くメシの準備をしろ。餓死するにはまだ早いぞ。」
大　祐　「そうだな……うん、ぼんやりしてる場合じゃないよな。健全なる精神と健全なる肉体を養うためにも、食欲を満たすのが最優先！　何か食べられるもの探しに行こう！　オレ、テレビで見たことある。こーゆー時は魚を捕ればいいんだ、（次第に明るく）焼いて食うだけだし塩はあるし。イケる筈！」

SE　すっくと立ち上がる大祐

大　祐　「よぉし、小瓶神見てろよ！　テレビで培ったオレのスーパースキルを！」

SE　ざぶざぶ海に入って行く大祐

大　祐　「いくぞ……潮を読み海と一体化し大自然の一部となり、その時を待つんだ……」

SE　波音

カッ（大祐目を見開く）

大　祐　「いまだ！」

SE　バシャーン

大　祐　「おっかしいなー！　テレビの人はこうやって素手で魚をわし掴みにしてたのに……でも同じ人間なんだからオレにも出来る筈！　有酸素運動にもなって一石二鳥じゃ――――！」

SE　ザブーン　波音

大　祐　「いまだ！」

SE　ザブーン

大　祐　「いまだ！」

SE　ザブーン

大　祐　「いまだ！」「いま、（海水飲んで）げぼぼぼぼ」「いま！」「い、いま！」「居間！」「い！　まー！」「うひー！」「ぶひー！」「おらおらおらおら」「ドララララ」「むだむだむだー！」

波間に消えていく大祐の声

○夕刻　大祐の住みかの近く

SE　ずるずると重い足どり　うなだれて歩く大祐

大　祐　「うぅぅ……腹減った……結局朝から何も食ってない……」

どこからか美味しそうな匂いが漂ってくるのに気づく大祐

大　祐　「!?　ふんふん……何だこの香ばしくてかぐわしい匂い……ふんふん……ふはぁ～、この匂いは！」

SE　かまどの火の音聞こえてくる　つんのめるように駆け寄る大祐
かまどの前で小枝に串刺しにしたキノコ焼いてる戀

戀　「（優しく）お帰り。お疲れさま。」

大　祐　「……あ……（目をこすって）また戀の幻覚が……」

戀　「腹減ってない？　夕飯にしようか。向こうの林に入ったら、結構色々採れたからさ。一緒に食べよう、な？」

大　祐　「ぎゃふ～～ん！（膝ついて半泣き）お、お前、何ていいヤツなんだ……」

戀　「まだ焼いてる途中だから、まずはこっちの果物食べてろよ。ほら」

SE　キラキラ～ン（全財産級の宝物のイメージ）
果物の入った籠がわりの帽子差し出す戀

大　祐　「うひょおぉぉぉぉ」

空腹のため血相変えて受け取る大祐

大　祐　「すっげ～、良く見つけたな！　マンゴーとミカン？　いい匂いするぅ……いただきまーす、はぐっ！　ぅおぉぉ～、ほっぺた落ちそ～。疲れた体に染み渡る～！（種まで飲みこむ勢いで暫く食べ続ける）」

戀　「本当はダイエット中には食べない方がいいんだけどな、果物。でも今は非常事態だから、先輩も許してくれるだろう」

大　祐　「（少し耳に痛い）うん……ダイエットかぁ……」

戀　「さぁ、出来た！　キノコの串焼き、美味しそうだろ？」

キノコを火から下ろして串刺しのまま差し出す戀

大　祐　「（コロッと）うほほぉー！　超うまそう！」

戀　「塩しかないけど、勘弁な」

大　祐　「全然オッケー！　いっただきまーす！」

戀　「いただきまーす！」

大　祐　「はふはふむしゃむしゃ……あんまりこうやってキノコ食べたことなかったけど、すっごい美味しい。オレ今まで人生損してたかもな！」

戀　「むしゃむしゃ……キノコは栄養価も高くて、低カロリーでミネラルも豊富だからダイエット中にいいって先輩が言ってた。食物繊維も沢山入ってるから、デトックス効果も期待出来るだろうし」

大　祐　「ふむふむ……むしゃむしゃ……」

戀　「何かこうしてると、中学ん時の林間学校思い出すな」

大　祐　「あ～、レンが転んで肉グチャグチャにしちゃったから、オレらの班だけ肉無しカレーだったんだよなー、あはははは」

戀　「（急に泣き出す）う、う、うううぅ、そのセツは大変申し訳ありませんでした、うううぅ」

大　祐　「（あまり気にせず）お、レンどうした？　別に今ごろ泣いて謝ることじゃ……ふ、ふふふふふ、あはははは、ふはははははは（高笑い）」

戀　「本当に……本当に……申し訳ありましぇぇん！　班のみんなの恨みがましい目が忘れられましぇん、ううう、せっかくの林間学校の思い出を台無しにして……俺は……俺は何てダメなやつなんだぁぁ～～（号泣）」

大　祐　「そーだそーだ、お前は何てダメなやつなんだぁ！　この泣き顔ブス！　ぽんこつめー！　オレはブタでお前はぽんこつ、二人あわせてトンこっつだぁ！　あはは、あはははははむはははははは」

戀　「うえーん、うえーん……ごめんなさ～～～～い」

SE　ドドドと走り去って行く戀

腹を抱えて笑い転げる大祐

大　祐　「ははは！　あ、レ、レ～～ン！　じゃなくてレンの幻覚ぅぅぅ！　うは！　うはははははは！　ふはははははは！」

SE　ピュ――――　ガン！　大祐の頭に落ちる小瓶

大　祐　「はうっ！（笑い続ける）ふはははは！　わ～はははは！」

SE　ピンポーン（注意を喚起するチャイム音）

まっしゅう　「良い子のみんなはけっして、知識のない無謀なキノコ狩りをしてはいけません。」

大祐の高笑い　FO

○翌朝　大祐の住みかの前

SE　遠い波音、朝の鳥の声

火の消えたかまどの前で目を覚ます大祐

大　祐　「は！　こ、ここは……！（起こそうとした体に痛みが走って）う、か、体が痛い、地べたで寝たからだな……うぅ、飯を食った後から記憶がないような気がする……」

SE　体を起こす大祐　大きく伸び

大　祐　「う――――ん……全然寝た感じがしない。（気落ちして）結局昨日は十ヶ条なんか守れなかったし、身体はだるいし頭は重いし最悪だ……

（気を取り直し）いやいや、昨日のことは昨日のこと、今日こそちゃんとやればいいんだ！　えーと、朝はまず朝日を浴びる！　むむ？　今既に全身で浴びている！　美味しい空気も吸っている！　ぷはー、ぷはー！

それから何だっけ……あっそうだ！　毎日自分の体重20キロにつき一リットルの水を飲む！　……うーん……」

SE　ピュー　コツン！

大　祐　「はぅっ！」

まっしゅう　「早く体重を量るように。」

大　祐　「ぎゃー！　朝から小瓶神まっしゅう、オレの心を読んでいるぅ！」

SE　ピュー　コツン！

大　祐　「いやん！」

まっしゅう　「早くしろ」

大　祐　「（ぐずぐずと）確かに……体重が分からないとどれくらいの水を飲んだらいいか分からない。

（コロッと）けど大体目分量でいいんじゃないかな、なーんちて！」

流星群のごとく降ってくる小瓶の嵐　埋まりかける大祐

SE　ピューコツン！　ピューコツ！　ピューコツ！

ドガガガガ！　ガラガラガラン！

（空の牛乳瓶のコンテナを十数段ひっくり返した感じ）

以下SEに被せて

まっしゅう　「早く」「早く」「早く」「早く」「早くしろ」「ウジ虫」「肉だるま」

大　祐　「ぎゃ！　ぎゃ！　ぎゃ！　痛い痛い痛い！　埋まる！　分かった！　分かったから！　体重量るから！」

SE　ぴたっと止む小瓶の嵐　最後にひと瓶コロコロ転がって止まる

大　祐　「全く……まっしゅうめ気の短いヤツだ……（ぶつくさ）こっちにだって心の準備ってものが」

SE　ピュ――――　すごい遠くから飛んでくるビア樽ぐらいの大瓶

大　祐　「!!」

SE　ずど――――ん　地面にめり込む大瓶

大　祐　「（腰を抜かしそう）ぎょへえぇぇ！」

まっしゅう　「（重々しく）早く体重を量れ」

大　祐　「分かりました……量らせていただきます……」

SE　ゴソゴソ　バッグの底から体重計取り出す大祐
ピッピッピッピッ　ピー（セッティング～計測完了音）

大　祐　「……久しぶりに乗ったけど……み、見たくない……見たくないけど……
この現実！　カッ！（目を見開く）……おわ～！　良かった、92キロ！
完全に戻った訳じゃなかった!!」

SE　ピュ――――――――　ものすごく遠くから飛んでくる特大瓶

大　祐　「（焦り）ま、まずい！　まっしゅうに聞かれた!!」

SE　ずばばばばばーん　地面にめり込む特大瓶

大　祐　「ほんがらげぇぇぇ！（死ぬ！　当たったら死ぬ！）」

まっしゅう　「安心している場合ではない。己を知り、ここから気を引き締め、真面目にリバウンド防止プログラムに取りかかるように。次は部屋の掃除だ、ぐずぐずするな！」

SE　ふかぶかとひれ伏す大祐

大　祐　「ははーっ」

軽く時間経過
掃除の終わった住みかでひと息ついてる大祐

大　祐　「ふ～、掃除終了っと！　（寝床がわりのシートに座りこんで）しかしまっしゅう……ホント何か、メガネかけたマシュー先輩に良く似てる気がするっていうか……ま、ただの小瓶の神だけどな。さてと、体重も分かったところだから、今日の分の水を飲み干すぜ！　92キロだったから大体4.5リットルか……ってことはこの四リットルのボトル一本ちょっと？　結構あるなぁ……よおぉぉぉし！（飲む）がばばばば、ごばばばば、ごきゅごきゅごきゅ、ぶはぁぁ！　このペットボトル重すぎ！」

SE　ピュー　飛来する小瓶

大　祐　「がばばばば、ごばばばば、がばばばば、ごごごご」

SE　ガツン！

大　祐　「っぱあああ！」

まっしゅう　「ウジ虫、下等生物、この肉だるま。誰が一気に飲めと言った。こまめに飲めと書いただろう！　次は洗濯、そして風呂を何とかしろ、キリキリ動け！」

大　祐　「すみませんすみませんごめんなさい！」

○夕方　浜辺

SE　小潮で静かな波の音

風呂を自作して浸かってる大祐

SE　バンバン！　海水の入ったドラム缶を叩く大祐

大　祐　「ばばばば～ん♪　ばばばばば～ん♪　うへへへへん♪　風呂はちょーっと難しいと思ってたけど、砂浜でちょうどいい大きさのドラム缶を見つけてやったぜ！　鍋とか空いたペットボトルとかでちまちま海水運んでたら一日終わっちゃったけど、ソーラーパワーであったまっていい湯だよ♪
名づけて大祐風呂！　いや～、自分で作った風呂は格別かっくべつぅー♡」

SE　ピュー　飛来する小瓶

大　祐　「あれ！　まだ何にもしてないのに!?」

SE　バッシャンとドラム缶に落ちる小瓶　大祐の顔にはねる海水

大　祐　「ぶは！」

まっしゅう　「海水風呂、かっこ塩化物泉かっこ閉じ、の効能について。海水にはナトリウム、マグネシウム、カリウムなど数十種類に及ぶミネラル成分が入っており、皮膚からそれらの成分を吸収することによって、代謝機能を高めることができる。
発汗作用もあり、デトックス、美肌また殺菌効果も同時に期待出来る。
塩化物泉の定義として、温泉水一キログラム中の含有成分が一グラム以上あり、陰イオンの主成分が塩化物イオンであること、とされているため、自宅で海水風呂、かっこ塩風呂かっこ閉じ、を作る際には、湯一リットルにつき一グラムの天然の塩を入れると良い。（続きが重要なので強調して）なお」

大　祐　「（遮って）ながい！　むずかちいぃ！　オレ理科とか科学とか苦手だし良く分かんないけど、とにかく！　海水風呂は体にいいってことだよな。オレ、やるじゃ――――ん！　さて、さっき海で洗っといたパンツもそろそろ乾いてるだろうし、風呂からあがろう！」

SE　ざばー　風呂からあがる大祐（素裸）
辺りを見回す

大　祐　「えっとパンツパンツ、どこの木に引っかけたっけな……あ、あそこだ！ダーッシュ！」

SE　ズドドドド　砂浜を走る大祐
ヤシの苗木からパンツを取る　木擦れ音

大　祐　「おぉ、乾いてる乾いてる、さすが南の絶海の孤島♪　ひょっとしたらオレも、ちょっとは日焼けしてワイルドになったかな？　ってうわっ！　何だこりゃ、パンツばりばりじゃん！　これ履けるの？　でも履かないってわけにもいかないしな……」

パンツを履く大祐

大　祐　「うそりゃ！　う！　ゴワゴワする！　ん!?　何か全身ベタベタする！　むむむ、か、痒い！　パンツが痒い！　カユいカユいカユい！　かいぃぃぃぃ！　ひぃぃぃぃ！（アドリブ少し続けてください）」

砂浜で跳ね回る大祐　以下、大祐のセリフに被せて

SE　ピンポーン

まっしゅう　「（続きであることを強調して）なお。通常の塩化物泉の塩分濃度は0.1パーセントなので必要ないが、海水風呂においては塩分濃度が３％～５％と濃いため、風呂上がり、又は洗濯の後は真水でよく濯ぐべし。」

大　祐　「（まだ跳ね回りながら）先に言えよおぉぉぉぉぉぉ」

まっしゅう　「そう言えば貴様、飲み水は確保したのか」

ぴたっと止まる大祐

大　祐　「まだであります、サー！（うろたえて）やっべぇ、ペットボトルの水飲み干したままだった！　まずいよやばいよ、こーなったら！　雨乞いして雨水を溜めるしかない！　でも雨乞いってどーやるんだっけ？　キャンプファイヤーみたいなのだっけ？　えぇいめんどくさい、（適当な節回しで雨乞いの歌）ドンドコドコドコ雨よ～降れ～～雨あ～めふ～れふ～れ、か～あちゃ～んが～♪」

SE　ピシャー　ドカーン　晴天の霹靂

ザバーッっとスコール降り注ぐ

大　祐　「じゃぁぁ雨～～～～～っ!?（天に向かって）ちょっと待てちょっと待てって！まだ水貯めるもの用意してないんだあぁぁぁ!!」

○深夜　大祐の住みか

SE　遠い波音、ジャングルっぽい虫の声

眠っていた大祐、ふと目を覚ます

大　祐　「む～～……ん……？」

少し離れたところに戀が寝袋で寝ている

戀　「（寝息）ス――……ス――……」

SE　大祐、目をこすって体を起こす

大祐　「むむ！　こんな夜中にまたもや戀の幻覚が」

戀　「（安らかな寝息）ス――……ス――……」

大祐　「しかも寝てるし……」

SE　大祐そっと起き上がってあぐらをかく

大祐　「（モノローグぽく）昨日から、オレに何かが起きている。まぁ、デブ規制法とかでいきなりこんな無人島に放り出されたから仕方がないっちゃ仕方がないかもだけど……親友の幻覚とか先輩の幻聴とか何度も何度も。オレ大丈夫か？　二週間後……いや十日後、無事にここから出られるのかな。まさか一生この無人島暮らしとかあり得ないよな？　いやいや……とりあえず心を落ち着けよう。そうだ、十ヶ条に瞑想しろとか書いてあったな」

大きく息を吸って目を閉じる大祐

大祐　「よし、瞑想！　うっ、オレはすでに……ねむっている……」

戀　「（安らかな寝息）ス――……ス――……」

大祐　「（でかいイビキ）ぐお～～……ぐお～～……」

二人の寝息　FO

○翌朝　大祐の住みか

SE　遠い波音、朝の鳥の声～夜の虫の声

大祐　「体重計オン！　セット完了！　異常なし！　体重変化無し！」

戀　「まずは洞穴を15分掃除……にぎゃあぁぁなめくじぃぃぃぃ!!!」

大祐　「スーパー塩水マッハ二十号くんを飲み干す!!」

SE　ごぎゅるるる　腹の音

戀　「自分を褒める、許す……？　あー、俺ってまじすごいわー。マジイケメンだわー。マジ神だわー。マジ光り輝いてるわー。」

大　祐　「今日こそ魚を！　……今だぁぁ!!」

SE　バッシャーン　空振り

戀　「キノコを摂ろう……そして一日の疲れを大祐風呂で癒やそう！」

大祐＆戀　「ふぅ～生き返るぅ～～」

戀　「てゆーか、せまっ！」

大　祐　「幻覚のくせに文句かよ!?」

戀　「瞑想する時は呼吸を意識するんだ！」

大祐＆戀　「就寝!!」

○また翌朝　大祐の住みか

大　祐　「体重計オン！　セット完了！　異常なし！　体重変化無し（焦）」

戀　「まずは洞穴の掃除を……にぎゃあぁぁぁゲジゲジイィィ!!!」

大　祐　「スーパー塩水マッハ二十号くんを飲み干す!!」

SE　ぐぎゅごぎゅるるる　腹の音

戀　「周りの仲間を大切にする……大祐頑張れ！　ファイトだ！　光ってるぞ！」

大　祐　「今日こそ魚を！　……今だ!!」

SE　しゅばばばば　空振り

大　祐　「あ～っ惜しい！」

戀　「キノコを摂ろう……と思ったら美味しそうな木の実見ぃっけた♪」

大祐＆戀　「ばばばば～ん♪　ばばばばば～ん♪　あははん♪」

戀　「大祐あんまりくっつくな！」

大　祐　「お前こそ幻覚のくせにひっつくな！」
戀　「大祐見てろ、これが正しい瞑想のしかただ！（目閉じて）すー……はー……すー……はー……吸います吸います吐きます吐きます！」
大祐＆戀　「就寝!!」

○またまた翌朝　大祐の住みか

大　祐　「体重計オン！　セット完了！　異常なし！　体重変化無し（泣）」
戀　「まずは洞穴の掃除を……にぎゃあぁぁアナコンダアアア!!!」
大　祐　「スーパー塩水マッハ二十号くんを飲み干す!!」

SE　ごごごごごごごごごごごこ　腹の音

戀　「大祐！　お前の為に木の枝を削って銛を作っておいた、これを使え！」
大　祐　「サンキューレン……今だ！」

SE　シュバッ
びちびちびちびち　魚がはねる

大　祐　「っうっしゃあぁぁぁあ!!　捕ったどおぉぉぉお！」
戀　「キノコを摂ろう……と思ったら今日は大漁だあ！　大祐やったな！」
戀　「一生懸命頑張った後の大祐風呂は」
大　祐　「サイコーだぜ！」
戀　「腹の動きを意識して瞑想だ！　膨らみ膨らみ縮み縮み」
大祐＆戀　「就寝!!」

5　危機

○タイトルコール

BGM　サスペンスっぽいジングル

大　祐　「（シリアスに）マシュー先生の甘辛ダイエットプログラム
餅のちRe！ バウンド」
戀　「それでもネコ」

SE　キーボードのカタカタ

大　祐　「ファイル５（ファイブ）。危機」

SE　衝撃的なタッチ

○午前　浜辺

SE　打ち寄せる波の音、鳥の声

大　祐　「（ナレーション風）この島に流されてから、今日で七日めの朝を迎えた。
不意に現れては消える戀の幻覚にも、降ってくる小瓶にも、マシュー先輩の
幻聴にもすっかり慣れた。
特にレンは、幻覚とは思えないほどその存在感を増していた」

座りこんで海眺めてる大祐と戀

大　祐　「もう七日も経ったけど……オレ、健全な精神と肉体を手に入れられたのかな？」
戀　「分からないけど、サバイバルな技術は手に入れたぞ」
大　祐　「（溜め息）はぁ……。ところでレン、さっきから気になってんだけど、
その海水浴っぽい浮き輪。なんでそんなの持ってんの」
戀　「これか？（得意げに）スーパー浮き輪くん三号だ！」
大　祐　「すーぱーうきわくんさんごう……？」
戀　「（笑顔で）ほら、お前が魚捕りに行くからさ。今日は俺も一緒に行こうと
思って」
大　祐　「へっ!?」
戀　「お前が捕った魚、運んでやるよ」
大　祐　「お前が来るの？」

戀　「（怪訝）……何か？」
大祐　「だってお前泳げないじゃん」
戀　「はあ？　泳げますけど？」
大祐　「お前のは泳いでるって言わないの。溺れてるって言うの」
戀　「素人目には分からないかもしれないけど、ちょっとずつ進んでるんだよ」
大祐　「お前が素人だよ!?」
戀　「バ、バカにすて!!　お前だって素人だべ!!　検定でもあるんべやか？　全国水泳能力検定一級か！」
大祐　「（小声で）浮き輪持ってる人間に言われたくないんですけど……（大きく）あー分かった分かった分かりました！　オレが悪かったです！
（溜め息ついて）……よし行くぞ！　着いてこい！」
戀　「おー！」

SE　波打ち際を歩く二人（レンは胴に浮き輪を通している）
波が足にかかって少しビクッとなる戀

戀　「ひゃっ……（少し不安）意外と冷たいな」
大祐　「気をつけろよ～？　でっけえ波来そうになったら後ろ向きに踏んばって、背中で流すんだぞ」
戀　「お、おう！　任せとけ！」

SE　ざばーん　ざばーん

大祐　「てか今日ちょっと荒れてるな。レン、足の着かないトコ絶対行くなよー」
戀　「（波を受けるのでわりといっぱいいっぱい）分かってるー！」
大祐　「ほんとに大丈夫かなあいつ……ま、昔とは違うし自分で何とかするか。さぁ、今日も捕るぞー！」

SE　ざばーん　ざばーん
意識を集中して魚を目で追う大祐

大祐　「そこだ！」

SE　しゅばっ！　びちびちびち！

大　祐　「よっしゃあ！　分かってたけど素手より銛の方が効率いいわ。お～いレン、捕れたぞ～」

SE　ざばーん　ざばーん

大　祐　「あれ（見回して）……やべっ、浮き輪だけ浮いてる!?　ぷはっ」

SE　ばっしゃばっしゃ　浮き輪まで泳ぐ大祐（数メートル）
むぎゅ！　浮き輪ひっ掴んで立つ大祐（胸ぐらいの水深）

大　祐　「ぷは！　浮き輪捕獲っ……お～いレ～ン、どこいったー？」

SE　ばっちゃばっちゃ　二十メートルほど離れた所で溺れてる戀

戀　「（波に攫われてる）だだだだ（海水飲んでむせる）ぐぼ、ごぼっ、だい、だいす……大祐ぇぇ!!」

大　祐　「ちょ、やっぱり溺れてんじゃん！」

レンの方へ向かう大祐

大　祐　「（歩きながら大声で）何してんだよ、足の着かないトコ行くなっつったろー！」

戀　「あ、あし、足攣った!!　がぼ！」

大　祐　「ちょ、まじかよ!!　だから言ったのに――！　待ってろ、すぐ行くから!!」

SE　ばっしゃばっしゃ　浮き輪持って泳ぐ大祐
浜から流され足が着かない深さでパニックになってる戀

戀　「（かなり海水飲んでる）がぼがぼ、くは！　うわぁぁぁ！」

泳ぎ着く大祐

大　祐　「レン！　しっかり」

戀　「うわぁぁぁ（暫く大暴れのアドリブください）」

夢中で大祐にしがみつく戀　大祐海中に沈む

大　祐　「（沈められ）がぼ、ぷは、落ち着け！　がぼ、ぶは！　とにかく落ち着けぇ!!　頭押さえん（な）……がぼぼぼ」

頭から海中に沈められる大祐　再び水面に上がる

大　祐　「げほげほっ……ったく、しっかりしろ!!」

戀　「がぼがぼ……」

SE　バッチ――ン　思いきり戀の頬をぶっ叩く大祐

戀　「（正気に戻って）痛えぇぇ！　何すんだよ!!　がぼ」

大　祐　「いいからこの浮き輪に掴まれぇ！」

漸く浮き輪つかむ戀

戀　「げほげほげほ！　助かったぁぁ！」

大　祐　「（かなり疲労）ったく泳げねぇのに無茶すっからだろ！　しっかりしろ、このうんち（運動音痴）野郎！」

戀　「（強がり）うるへー！　ちょっと足が攣っただけだって……今度こそ俺の華麗なるスイミングテクニックを見せてやる」

大　祐　「やめとけ、また足攣るぞ！　岸まで距離あるし、このまま連れてくから掴まってろよ」

戀　「（さすがにシュンとして）すまん……」

岸に向かって泳ぐ大祐、曳かれる戀

SE　ズゴゴゴゴゴ　押し寄せる波音

戀　「お……（巨大な波が押し寄せてくるのが見えて恐怖）おぉぉぉ、だ、大祐、ヤバい」

大　祐　「（浮き輪曳いて泳ぎながら）なんだ～？（振り返って）うはぁ！　でけぇ波（が来るっ）」

SE　どっぶ――ん　巨大な波に呑まれる二人
少し間あって海上に顔出す戀

戀　「ぷはー!!　やばー！　今のまじでやばかったよな！」

SE　ざざーんざざーん

戀　「だ、大祐？（見回して）あれ？　だいすけ――――――!!!」

○海中

SE　がぼがぼと潜水音
ダウンカレントにもみくちゃにされ沈んでいく大祐

大祐M　「まずい。上も下も分からない、息が出来ない。暗い。怖い。
オレはどこに向かってるんだ……。
薄れゆく意識の中で、幼い頃母親に抱かれたような安心感……そんなのを
思い出した」

SE　遠い小型クルーザーのエンジン音　海中に響いてくる
（陸上よりも遠くからで聞こえます）

○しけてる海上

浮き輪でぽつねんと波間に浮いてる戀　必死で大祐を探している

SE　ばしゃばしゃと水をかく戀

戀　「（溺れたとき海水飲んだため声枯れ気味）だいすけぇぇ！　ちくしょう、
見えねぇ……どこだよ大祐！　ふざけてないで出てこい、馬鹿野郎!!　だい
すけぇ！　だいすけぇぇ！（次第に涙にじんで）どこだよ、だいすけぇぇ!!」

SE　遠くから波を切って近づいてくる小型クルーザーのエンジン音
シングルホーンの警笛（ラッパのような音）

戀　「（気づき）あ……あれは……!?」

6　黒幕の正体

○タイトルコール

BGM　大団円っぽいジングル

大　祐　「（穏やかに）マシュー先生の甘辛ダイエットプログラム
餅のちRe！ バウンド」

戀　「それでもネコ」

SE　キーボードのカタカタ

大　祐　「ファイル6（シックス）。黒幕の正体」

SE　衝撃的なタッチ

○島の反対側にあるマシューの別荘　広間

SE　ガラス越しの暴風雨　遠い波音
かちゃかちゃ　テーブルセッティングの音
良い匂いが漂う中、ソファーベッドに寝かされている大祐

大　祐　「（悪夢にうなされ）うーん……うーん……海……怖いょぉ…」

少し離れたところで食卓についてる戀とマシュー

戀　「いやぁびっくりしましたよー、先輩は本当に料理が上手ですね！」
マシュー　「アメリカで何年も修行したからね！　マグロの解体だってお手のものだよ♪」
大　祐　「うーん……（眠りながらにして食事の匂いを嗅ぎつける）くん……くん
　くんくん……」
マシュー　「今日の海は荒れてたけど、港でゴージャスな食材を仕入れたから、腕によりをかけたよ。じゃ～ん♪」

SE　大皿の上の銀の蓋を取るマシュー
　キラキラキラ～ン　ご馳走タッチ

戀　「（感激）うわぁぁぁ」
マシュー　「ふかひれのお刺身にふかひれの焼売、こっちは蟹の卵入りふかひれスープ、そしてふかひれの特大ステーキなどなど♪　ふかひれは100グラム中に84グラムのタンパク質を含んでいて、かの、お姉妹も好んで召し上がってるそうだよ」
戀　「どれもめちゃくちゃ美味しそうです！」
マシュー　「君たち二人とも、本当に頑張ったからね」
戀　「ありがとうございます！　先輩すごい、すごすぎます！」
大　祐　「うーん……うーん……お腹減ったよぉ……」

戀、大祐の方に目をやって

戀　「大祐のやつ全然起きる気配ないし、冷めちゃうし、俺たちだけで先にいただいちゃいましょうよ！」
マシュー　「うーん、そうだね……海水もだいぶ飲んでたし、あの様子じゃ食べられそうもないかな。後でお粥でも作ってあげようか」

SE　ガバァ！　大祐跳ね起きる

大　祐　「何でオレだけ粗食なんですかー!!　オレ頑張ったのに！　オレが一番頑張ったのに！」
戀　「（穏やかに）おぉ、起きた。天下一品の食欲だな」

マシュー　「大祐くん、おはよう。体の具合はどう？　どこか痛いところはあるかい？」
大　祐　「いいえ！　ふっかふかのベッドで寝たからちょー気分いいです！　……ん？（もぎゅもぎゅとベッド押してみて）ふかふかのベッド？」

おおげさに驚く大祐　ソファーベッドのスプリング弾む

大　祐　「どええぇぇ!?　なんでオレベッドで寝てるの？　あの島から帰って来たんですか？」
マシュー　「いや、僕たちはまだ無人島にいるよ」
大　祐　「え？」
マシュー　「ここは君たちがいたところとは反対側にある、僕の別荘だよ」
大　祐　「えぇぇぇぇぇぇ!!?」

軽く時間経過　三人で食卓を囲んで食事しながら会話
（食べ始めではないので食べる芝居はあまりなくてよいです）

戀　「つまり、今回の件はすべて先輩の、計画だったんだよ」
大　祐　「な、なんだって!?（マシューに）どういうことですか？」
マシュー　「（改まって）大祐くん。ここへ来る前の日の晩、きみは中華屋に行って、ダイエットしている人間にあるまじきメニューを大量に注文したね？」
大　祐　「はい、しました！　すごく美味しい料理だったけど、めちゃくちゃ腕のいい店員がオレにだけすごく冷たかったです！」
マシュー　「実はそれは僕だ」
大　祐　「な、なんだってぇぇ!?」
マシュー　「その後、君はコンビニに寄って、ダイエットをしている人間にあるまじき多量の糖質の固まりとジャンクフードを購入しようとしたね？」
大　祐　「はい！　でもデブ規制法で売れないってバイトの人が言って、ちょっとしか買わせてくれなかったんです！」
マシュー　「実はそれも僕だ」
大　祐　「なんてこった！　じゃあ、デブ規制法ってゆーのは」
マシュー　「（あっさり）そんな法律はないよ」
大　祐　「ですよねぇぇぇぇ！　おかしいと思ってましたよこんちくしょぉ！」

マシュー　「法律ではないけれど……（にこやかに）あれは僕のダイエットメソッドをまとめたものだよ。で、そうやってきみのご近所に潜入捜査をした僕は、きみが正しいダイエットから道を踏み外していることを知ったんだ。……そして、今回の計画を立てた。名づけて、持賀大祐くん補完計画さ」

大　祐　「うぎゃーん！　補完って言えば聞こえはいいですけど、ドラムバッグ一個と水鉄砲で正直どうなるかと思いましたよ!!　しかも姿は見せずに小瓶投げて済まそうとかしてませんでしたか！　してませんでしたかー!?」

SE　ポンポン　大祐の肩叩く戀

戀　「まあ、細かいことは気にするな。体重も少しは減っただろうし、マッハ二十号くんでデトックスも出来ただろ。それに、自分にとって良いものとか良くないものとか、大切なものとか要らないものとか、改めて考えるきっかけにもなったんじゃないか？」

大　祐　「ぬおぉぉぉお！（ガッシュ風泣き芝居、少し続けて）」

マシュー　「（意に介さず）肉体が健全ならば精神も健全になる……これは逆もしかり。生活習慣や生き方を正せば、肉体もそれについてくる。この計画でダイエットの継続に必要な健全なる精神と健全なる肉体を、なんとかして大祐くんに体得してもらいたかったんだ」

大　祐　「でもそれならそうと最初から言ってくれれば良かったのに～！　黒ずくめの男に襲われて島流しに遭って……なんとゆーか、もう！　オレ死ぬかと思いましたよ！」

マシュー　「ごめんごめん。僕は『丁重にご案内するように』指示したつもりだったんだけど」

大　祐　「あれが丁重をぉぉぉ!?」

マシュー　「戀くんまで、いつの間にか大祐くんと一緒にサバイバルしてるし……」

戀　「いやそれは俺が勝手に……」

マシュー　「（満面の笑み）大祐くんが心配で見に行ってくれてたんだね」

戀　「（狼狽）あ、ぅあ、こ、こんなヤツのこと心配なんて……どんなアホづらしてるかちょっと様子を見に行ってみたってゆーか……ごにょごにょ……」

大　祐　「ほー、そうか！　やっぱり最初っから幻覚じゃなかったんだな。心配で見に来てくれてたんだな！（棒読み）でもお前が泳げねぇからこっちまで死ぬところだったな！　あーあ、死ぬところだったな！」

戀　「う、うるへい！　俺の泳ぎは今関係ないだろ！　お前がダイエットしてる

くせに道踏み外すからいけないんだろ！」

大　祐　「お、オレだって踏み外したくて踏み外したんじゃねー！　人の気持ちも知らないでこのっ……、お前なんてばーかばーか！　うんちまる!!」

戀　「むっきぃぃぃ！　お前こそ、マシュー先輩に助けてもらわなかったらあの世逝きだったくせに、ばーかばーか！　この死に損ない!!」

大　祐　「なんだとぉうッ」

痴話喧嘩にふきだすマシュー

マシュー　「ぷっ……」

大祐&戀　「（マシューを見る）？？？」

マシュー　「ふふっ……ふふ……あはははは」

戀　「（痴話喧嘩再開）ほらみろ、お前のせいで先輩に笑われただろ！」

大　祐　「何言ってんだ、お前のせいだろ!?」

戀　「いやお前！」

大　祐　「お前！」

戀　「お前!!」

大　祐　「おっまっえー!!」

マシュー　「（まだ笑いながら）二人とも……そろそろ終わりにして」

戀　「（少々不服）はい……すみません」

マシュー「（穏やかに）でもホントに、間に合って良かったよ。ここの海はもともと潮の流れが速くてね。しかも台風が近づいてるのに、君たちが海に向かったって連絡があったから。用心してクルーザーを出してたんだ」

戀　「（溺れたときを思い出して若干畏まり）そうだったんですか……」

大　祐　「（同）オレも泳ぎにはちょっと自信あったんですけど。すげぇ流れに引きずりこまれて、もうダメかと思いました」

SE　ガラス越しの暴風雨

暫しの沈黙ののち気を取り直して話題を変える大祐

大　祐　「まぁ、とにかく！　先輩、ありがとうございました！　ちょっと前からダイエット上手くいかなくなったりリバウンドしたりでむしゃくしゃしてたんですけど、ここに来てなんだが色々すっきりしました！　サバイバル生活も、何だかんだで結構楽しかったです」

戀　「(親友のタフさは尊敬してやってもいいと思いながら苦笑)『楽しかった』ねぇ……。そんじゃ大祐、せっかく先輩と合流したんだし、残りの一週間、本格的にサバイバルするぞ」

大　祐　「(怪訝)本格的ぃ？　あれ以上何を本格的にしろって言うんだよ」

戀　「そこで取り出したるはこれ」

SE　キラリーン　胸ポケットから黒々としたサングラス出す戀

戀　「(某ネコ型ロボっぽく)『せんぱいのめがね～、さんぐらすぱ～じょん～』」

SE　ズザザザドカッ　一気に後ずさって壁にぶつかる大祐

大　祐　「(恐怖)そ、それは！　やめるんだ！　封印されし魔神を呼び起こすなんてことは……」

SE　しゃきーん　サングラスをかけるマシュー

マシュー　「さあウジ虫ども！　貴様たちにスプーン一本で生き残る術を叩きこんでやる！」

大　祐　「ぅひぃ～～、出たぁぁぁ！」

マシュー　「人を化け物のように言うんじゃない！」

戀　「サーはサングラスでも変身出来るんですね♪」

マシュー　「ふむ。今回は特別に常夏バージョンだ。日焼けは目から来ると言うからな！」

戀　「(敬礼)サー！　流石です、サー！」

大　祐　「(同)流れる石のようであります！」

マシュー　「貴様、ふざけていると海に流すぞ。この腐れブタモチが！」

大　祐　「ぶ、ぶぶぶぶたもち……(泣)」

マシュー　「(キリッと)それでは諸君、これより本格的に訓練を始める！一日一生！　各々命を燃やし、明日に向かって走れ！」

大　祐　「(ヘタレ)明日ってどこにあるんですかぁ？　マシュー先生」

戀　「サー！　それは雑すぎませんか。サー！」

マシュー　「明日は貴様たちの心がつくる。いくぞ！　持賀大祐補完計画第二章、スタートだ！」

大　祐　「いやじゃあああぁぁぁぁぁあ」

7　マシューの日記

○タイトルコール

BGM　ほんわかジングル

大　祐　「（爽やかに）マシュー先生の甘辛ダイエットプログラム
餅のちRe！ バウンド」

戀　「それでもネコ」

マシュー　「ラスト・ファイル。マシューの日記」

○マシューの自室

SE　PCのファン音、キーボードのカタカタ
日記を書いているマシュー

マシュー　「十月三十日、曇りのち晴れ。
二週間の無人島サバイバル&デトックス計画を無事修了し、健全なる精神を健全なる肉体に宿した仔ぶたくんと黒ネコくんは、普段の生活へと帰っていきました。
仔ぶたくんはダイエットと再び向き合えるようになり、ストレスの上手な逃がし方を覚えたようです。
黒ネコくんは相変わらず、仔ぶたくんに連れ添うお嫁さんのようです。
冒険はしましたが、二人が喜んでくれたので一安心です。
これからも二人を見守って行きたいと思います、まる。」

おわり